



TITLE:

# 購買力平價説の一考察(下)

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 購買力平價説の一考察(下). 經濟論叢 1930, 31(1): 65-85

ISSUE DATE:

1930-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129907>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第

卷一十三第

行發日一月七年五和昭

## 論叢

簿記の出發に於ける一問題 . . . 法學博士 上野道輔

戶數割に於ける調整 . . . 法學博士 神戸正雄

數學的經濟學の論理的構造 . . . 文學博士 米田庄太郎

購買力平價說の一考察 . . . 文學博士 高田保馬

## 時論

米國移民法の改正に就いて . . . 法學博士 末廣重雄

## 說苑

東京市中心地晝間人口調査に就いて . . . 法學士 金谷重義

銀行の信用膨脹に就いて . . . 經濟學士 中谷實

## 雜錄

小賣規模の大と小賣費用との關係 . . . 經濟學士 谷口吉彦

都市の經濟的概念と本質 . . . 經濟學士 大谷政敬

## 法令

賠償金特別會計法中改正・市町村義務教育費國庫負擔法中改正・輸出補償法

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

# 購買力平價説の一考察（下）

高田 保馬

目次 一國際貸借説——二購買力平價説——三その難點（以上前號所載）——四購買力平價説と統計的資料——  
五購買力平價説の緩和せられたる形態（以上本號所載）

## 四 購買力平價説と統計的資料

次に、購買力平價説を統計的資料に適用することについての困難を考へる。所謂標準的商品の一集團（國際貿易に出入する重要商品の一集團）に對する一國貨幣の内部的、外部的購買力を比較し、その相等しき時期を以て基準とすることは、困難である。蓋しかゝる比較の極めて困難なるのみならず、内外購買力の相等しき時期が容易に見出しがたい。例へば一九一三年度を以て基準年度と認むる計算の仕方が採用せられてゐるが、此年度に於ける爲替相場が靜的（それと購買力平價とが一致してゐる）であると云ふことは論證せられない。大戰前、北米合衆國の物價は英國のそれよりも、英國は獨逸より、獨逸は伊太利より高かつたとは一部の學者に認めらるゝところである。而して、此一九一三年を基準として各國に於ける通貨膨脹の程度を比較し、その後の時

期に於ける購買力平價を算出する（事が少くも履行はれてゐる）。これはまづ貨幣數量説に伴ふ難點をさけることが出来ぬ。貨幣の對内價值は必ずしも貨幣數量に伴ひて動くものでないが故に、勿論此難點は、貨幣數量による代りにまともから一般物價によるときには、容易に免れ得るにしても、基本年度に於て内部的及び外部的の購買力が一致してゐないとすれば、それを基準として、後の時期の爲替相場の歸着する點を見出すことの計算も亦正確であり得まい。運賃及び輸出入關稅の差引計算について困難の伴ふことも、前に述べたところである。なほ輸出入の範圍に入り來る商品のみについて内部的・外部的の購買力の比較を行はず、一般物價指數について比較を行ふことから來る困難も、またすでに述べたところである。

此點については所謂交換方程式の變化の作用を考ふる必要がある。ケインズによれば、爲替の市場相場が常に購買力平價よりも下廻る傾向があらはるれば、別に何等かの理由なき限りは、基準の年度に比して交換方程式の惡化してゐることを推測せしめる。『資本の移動、賠償の支拂、勞働の相對的能率の變化、或はその國の特産物に對する世界需要の強さの變化と云ふ如きものゝ爲に、經濟學者の所謂交換方程式に變化を生ずれば、購買力平價と爲替相場との平衡點に永久に變更せらるゝに至るであらう』。此事が例を以て説明されてゐる。今W H二國があるとすると、輸出品の價格は國產品の價格と同様に變動する。交換方程式がH側に順となるとせよ（Hの生産物が

Wによりて強く需要せらるゝに至つた)。Hの商品の以前より少き數量を以てWの商品の以前と同一の數量と交換し得られる。一九一三年より一九二三年までに物價指數はWに於て一〇〇より一五五に、Hに於て一〇〇より一六〇に上る。是等の指數は國產品八割輸入品二割より調製せられてゐる。交換方程式はH側に一割有利となる、即ち、Hの商品の一定量にてWの商品の以前の數量よりも一割多くを獲得し得る。結果は次の如くなる。

(W)		(H)	
輸入品價格指數	(x)	輸入品價格指數	(x')
國產品同	(y)	國產品同	(y')
一般商品同	一五五	一般商品同	一六〇
	一六七		一四八
	一五二		一六三

一九二三年に於けるWの貨幣の購買力平價は一九一三年に比して一〇三となる( $160 \div 155 = 103$ )。之に反して爲替相場は一九一三年の平價に比すれば九七( $163 \div 167 = 148 \div 152 = 97$ )となる。WのHに對する交換方程式の惡化が永久的のものとすればその購買力平價は永久に爲替相場の均衡價格(上にのべたる靜的價格)以上に落つくはずである。

なほ前の表についての説明を附記する。<sup>9)</sup>

$$\begin{cases} 10x = 11y \\ 8y + 2x = 1550 \end{cases} \quad \begin{cases} 11x' = 10y' \\ 8y' + 2x' = 1600 \end{cases}$$

此場合、一九一三年を基準として計算せられたる購買力平價と爲替相場の落ちつきどころが永

9) 阿部内山兩氏譯『貨幣改革問題』一二六——一二八頁。

久に離れると云ふことがどこまで許し得られるであらうか。今の假定に於ては、各國の生産物は貿易品(まへの符號に於けるA/A')と國內の特産にして而も國內消費に限局せられたる商品(C/C')に限りてゐる。而して、H W兩國に共通なる商品(B/B')がない。併しながら、現實にはかう云ふ條件が與へられない、常に前掲の表に於て國產品としてあげられたるものゝ内には、兩國に共通に生産せられ消費せらるゝ商品を含むであらう。さうすると事情は次の如くなる。

H 國內の人々は一六三と云ふ高い價格を拂つて國產品(少くもその一部分)を買ふよりも、九七の貨幣を以てW國の貨幣一〇〇を獲得し、これを以て一五二の安い價格を以てWの同種類の商品を買ふであらう。同一數量の商品が國內に於ては一六三、Wから買へば一四八で入手せられるから。かくして、國產品の價格は低落する、爲替相場は騰貴する(支拂勘定建)。此運動はやはり、購買力平價をして爲替相場と極めて近く接近せしむるところまで進むはずである。たゞ、xとx'とがよほど特有なる性質を有し、それ〴〵W H兩國の何れかに於てのみ需要せられ、且つ需要國の相手國に於てのみ生産せらるゝと云ふ事情が存する限り、且つその賣買が外國貿易に於て占むる意義の限度に於てのみ、購買力平價と爲替相場とを引きはなし得る作用をもつ。私は同様な考方によりて、賠償の支拂資本の移動の如きものとても、その後の年度に於ける爲替相場の落ちつき所を基準の年度から算出したる購買力平價と永久に離れしめるとは考へ得ないものである。

## 五 購買力平價説の緩和せられたる形態

購買力平價説はその緩和せられたる形態について云ふとき、物價が常に必ず爲替相場を決定すると云ふ一方的因果關係を認むるのではない。爲替相場の變動が（よしそれが購買力の比率に基かざるものであるにしても）また物價の上に變動を及ぼすことを認める。而して、此場合の變動の結果も、落ちつくところは一般物價の比率と爲替相場との相一致するところにある、物價が爲替相場を決定する場合に於ける變動の進み行く先もそこにある。かくて、結局の姿に於ては、即ち靜的狀態に於ては、購買力平價と爲替相場とは相一致する性質のものであると云ふことなる。此緩和せられたる形態に於ける購買力平價説は、購買力平價が必ずしも爲替相場を決定するものとは見ず、二者の關係を相互作用、從ひて函數的關係と見るのである。これは前にも述べたるが如く、爲替相場を以て外國貨幣と云ふ一商品の價格として見る（又は自國貨幣を外國に於ける一商品としてみる）立場からの當然の結論である。何となれば一般均衡の理論は、すべての財の價格の間に、函數的關係の普遍的に支配するのを認むるのであるから。かくて、購買力平價は爲替相場を一義的に決定するところの原因ではない。第一に、それは現實の爲替相場の方向、性質を認識せしむるめじりである。爲替相場がそれと合一してゐるか、離れてゐるかにより、又如何

なる方向に離れてゐるかにより、それが靜的な爲替相場であると否とをしらしめ、又來るべき變動の方向と、その變動の程度がどれほどの幅をもつものであるかとを認めしめる。第二に、貿易上の收支が國際貸借の主要なる決定者である限り、而して、資本の流出入、賠償金の移動の如きは比較的に偶然的なる要素である限り、一般物價が爲替相場を決定すること、特に強しと云ひ得る。加之、一國の貨幣政策の影響は最も敏感に國內物價の上に現はれる、而して、漸く後に至りてのみ、爲替相場の上に及ぶ。このことは説明せられ易き事柄であると思ふ。これらの事情からして、物價の爲替を決定することは一般に、爲替によりて物價の決定せらるゝことよりも遙に強いと見なければならぬ。購買力平價説の本質が貨幣價值の指針としては對內的購買力の方が爲替の市場相場よりも結局信據するに足ると考ふる點にあり、と云ふのは大抵此意味である。

たゞ、一步を立入りて價格論的に吟味するときには、此緩和せられたる姿に於ける購買力平價説とても、爲替の靜的價格の究極的な説明ではない。これを與へむが爲には、すべての種類の商品に對する兩國の需要函數と供給函數とが認められねばならぬ。その上に、各商品ごとの運賃輸出入税を加算しなければならぬ。又他方に於てはあらゆる可能的なる爲替價格につれてこれらの變化する姿が考へられねばならぬ。而して、それらの相互決定作用の間から爲替相場の一義的に成立する事情を明にしなければなるまい。これはこれらのすべての事情が方程式の形に收めら



れ、それから決定せらるゝ未知數の一として、爲替相場が考へらるゝを要する。さうするとき、爲替相場の落ちつくべき靜的標準は一般物價の比率として購買力平價と精密に合一するものではないであらう。たゞ、今までのところ、前述の試みが完成せられてゐない、云はゞ近接値の意味に於て、しばらく購買力平價を以てそれに擬すること、それは意義あることであると思はれる。

『緩和された購買力平價説』の名稱はこれを山崎博士に借るものである。此名稱のみではない。購買力平價説に關する山崎博士の見解に貢ふところ頗る多い。<sup>10)</sup> その精緻なる見解以外に私の到達してゐるところは何物もない。

爲替と物價との相互作用を認め、而も貨幣の内部的・外部的購買力の釣合ふところに爲替相場の落ちつく點を認むる立場は、この緩和せられたる形の購買力平價説として、數へ得ると思ふ。さうすると、カツセル、ミイゼスの購買力平價説に反對的批評を試みる人々とても多くは之に屬しよう。

購買力平價説についてかつて加へたる批評を附記する。

『所謂購買力平價説に二重の難點が含まれる譯である。第一、全然輸出入の關係なき財がありとすれば、その價格は爲替相場に關係なき筈である、従つて一般購買力が直に貨幣の購買力を決定するとは云ひ難い。勿論すべての財の價格は何等かの相關關係に立ちて相互作用し相均衡する、従つて輸出入に全然關係なき（それ自體輸出入せられず、又他の財の輸出入によりて影響せられず、且つ影響せざる）財は存在しないであらう。然れども此關係の程度極めて薄き數多の財に至りては、その價格と爲替相場との聯絡が極めて乏しと見なければならぬ。此點がかの平價説に於て看過せられてゐる。第二、爲替相場が購買力の比例に一致することありとするも、それは必ずしも、爲替相場が此比例に落ちつく結果ではない。寧ろ購買力が爲替相場に追隨し適應したる結果なりと見なければならぬ。例へば、貨幣の對外價值が餘りに下落する時は、此貨幣を以て爲替を買ふことによりて對外債務を支拂ふよりも、商品の輸出によりて之を支拂ふことが有利である。其結果内國商品の價

10) 山崎博士『若干の貨幣問題』第三篇參照。

格騰貴となり爲替相場の下落となり、此の如くにして後者は購買力の比例に一致せむとする。爲替相場が貿易以外の國際賃によりても、また決定せらるゝところありとすれば、それは購買力の比例以外に獨立の決定原因を有する。而して之によりて定められたる爲替相場が一般購買力の變動を促がしかくしてそれ自體を購買力平價に一致せしめる。云はゞ相互作用相互適應の關係がそこに存在する譯である。

兩國に於ける購買力の比例と爲替相場との關係は、たゞ一の平行關係としてのみ、近似的に是認せられる。貨幣數量と物價との關係もまた一の統計的法則、即ち一の平行關係として是認せられる。此二者を結び付くる結果は、爲替相場と兩國に於ける貨幣の數量との間に一種の平行的關係が認めらるゝこととなる。貨幣數量説に従へば各國の貨幣數量の變動によりて爲替相場が決定せらるゝ譯である。然れども、貨幣數量説をとらざる場合といへども、なほ此數量の調節によりて爲替相場の左右せられるべきことは、別に述べたところによりて推知せられよう。

たゞ此相互適應の過程によりて、物價を離れたる爲替の變動、云はゞ爲替の物價への干渉は第二次的、偶然的のものにして、經濟が正常的進行の過程をとる間は、物價が爲替を決定するものと認められる。云はゞ購買力平價の爲替を決定するものが根本過程であると見られる。<sup>11)</sup>私は此見方をも肯定しようと思ふ。たゞ今までの事實に於て爲替の物價に對する干渉の程度がどれほどのものであつたか。これについては統計的考查を必要とする。』

なほ、國際貸借説と購買力平價説との關係は、之を商品の價格に關する需要供給説と、生産費説との關係に類似すと見る見解が、大體に於て誤つてゐないと思ふ。此意味に於て購買力平價に於て定まるところの爲替相場は一の靜的價格である。或る立場からは、需要供給説がすでに一の與へられたる價格から出發するもの、從ひて價格の變動をしか説き得ざるものであるが如く、國際貸借説もまた、與へられたる爲替相場から出發し、その變動を説明し得るに止まるものである、

11) Mildschub, Uebersicht über die neuere Geldliteratur, Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. 56. Band. S. 515.

と見られてゐる。然れども、商品價格に關する需要供給説も（これを素朴的な形式のものとして解せざる限り）一商品の價格そのもの、大さそのもの、決定を説明し得る（それが他の財の價格を前提としてゐることは、云ふまでもないが）。これと同様に、國際貸借説とても、爲替相場の大きさそのものを十分に説明し得るはずであり、その明にし得るところは爲替相場の變動に止らぬはずである。支拂の均衡が成立し得るためには、爲替の需給が相釣合ふことを要し、此釣合はその需要供給がそれ／＼需要價格供給價格の函數であるが故にのみ可能である。而も、此函數關係は現在の爲替相場からは原理上、獨立に定まる。

今單純なる一例示をミュラーの著者から借る。佛、奧兩國、從ひてフランとクロオネンとの間の爲替相場は、次の如き需要供給の關係から定まるとする。而もこの需要函數供給函數それ自體は國際貸借の事情そのものを示すに外ならぬ。<sup>12)</sup>

需要價格(從ひて供給價格)	フランの需要(國內に於ける)	クロオネンの需要(國外に於ける)
5クロオネン=0.22フラン	0	3700000(クロオネン)
4.50クロオネン=0.22フラン	200000(フラン)	2900000
4クロオネン=0.25フラン	500000	2000000
3.50クロオネン=0.27フラン	1200000	1700000
3クロオネン=0.33フラン	1700000	1600000

12) Hugo Müller, a. a. O. S. 53.

2.50 クロオネン = 0.40 フラン      2700000

2 クロオネン = 0.50 フラン      3500000

900000  
500000

三クロオネンが〇・二三フラン以上、三・五〇クロオネンが〇・二九フラン以下の相場に定まるであらう。雙方の需要函數はすべて國際貸借の事情が之を決定する。云ひかふれば、國際貸借の事情そのもの、中に與へられてゐる。若し、國際貸借説の内容が一般にかく解することを許さずと云ふものがあるならば、私は自ら之を此の如く解してゐると云ふより外はない。

たゞ前表に於ける總需要は各價格に於て新に添加せらるゝ數量と、それよりも都合あしき價格に於ける需要數量との和に外ならぬ。此各價格に於て新に需要せらるゝ數量を云ふものが、國際收支の事情を反映する、云はばその各項目の狀況によりて決定せらるゝわけである。

かくて國際貸借説は爲替相場の時々の大さ、從ひてその變動をも説明し得るはずである（但しその大さは需要函數、供給函の姿が與へられてのみ説明せられる）。けれども、此變動の間に於て結局落ちつく先のいづこにあるかと云ふことが、購買力平價説によりて示される。勿論落ちつく先の購買力平價の大さは、私の前に述べたところによるとき、現在の兩國貨幣の内部購買力の比率によりては示されぬ。このことは、價格の落ちつく先である生産費が現在の生産費ではなく、現在の生産物價格との相互作用によりて定まるべき、來るべき生産財の價格によりて定まるのと

規を一にする。

たゞ茲に問題としたいのは所謂交換方程式の惡化である。これには二の場合を分ちて考へたいと思ふ。第一。甲乙兩國の特産品に對する需給關係の變化から、例へば甲國の特産品に對する乙國の需要減じ、乙國の特産品に對する甲國の需要増加することから、爲替相場が購買力平價（これはある年を基準として算出せられたる）よりも甲國にとりて不利なる點に落ちつく。けれどもかう云ふ關係は前にも述べたるが如く、特産品以外共通に生産し消費せらるゝ第三商品群の存する以上、ありうべからざることである。たゞ購買力平價までに爲替相場の落ちつく過渡的段階としてのみ存しうる事情であらう。第二。年々の利子、賠償金の支拂と云ふが如き事情の爲に、購買力平價から爲替相場の離るゝことを考へ得る。而も此離れが持續的であり、靜的であることも考へ得られる、そこに一の問題がある。

乙國より甲國に向ひてすでに巨額の資本が流入し、從ひて年々これに對する利子が甲國より乙國に支拂はれねばならぬとする、又は甲國より年々一定額の賠償金を支拂はねばならぬとする。此國際的債務關係が甲乙兩國間の爲替相場の上に如何なる作用を生ずるか。十分なる意味に於て靜的なる爲替相場と云ふもの、成立は考へがたく思はれる。此場合、爲替相場は購買力平價と相合一して、そこに落ちつき得るか。第一。例へば一定の期間の後に此二者が合一するときがある

とする。而もこの後とても、支拂義務の履行の爲に一定の金額が乙國に向ひて流入するであらう。甲國側に於て國際貸借上、格別に有利なる事情のない限り、爲替相場は甲國に不利となる。次にこれによりて甲國の輸出が促進せられ輸入が阻止せられる、これが爲替相場をいくらか引きもどさうとする。且つまた甲國の物價が騰貴する。かくして爲替相場と購買力平價とが相合一するにしても、もはやもとの位置まで爲替相場が恢復するのではない。同一なる變動の過程は、債務關係の存續する限り無限に繰返されねばならぬ。かくして、そこには到達し得らるべき均衡、まことの靜的な爲替相場と云ふものゝ成立が考へ得られぬ。第二、然らば、購買力平價とはある一定の開きを保ちつゝ、そこに爲替相場が落ちつくのではないか。即ち年々一定金額の債務を履行しつゝ、而も國際的支拂均衡が維持せられ、爲替相場が變動なきを得るのではないか。例へば、年々利子として支拂はるべき金額だけの輸出超過があり得る高さに於て爲替相場が落ちつくのではないか。これは事實に於て現に生じ得る事柄である。而して此大さの爲替相場ならばいつまでも持續し得る性質をもつ。然れども、そこにまことの均衡があるか、そこに何等の變動の傾向がひそまざるかと云はゞ、均衡なく、變動の傾向あり、と云はざるを得ぬ。國際支拂均衡と云ふも其實、個々の經濟主體の行爲の綜合的結果に外ならぬ。今與へられたるが如き事情に於ては、甲國の物價が爲替相場の現在の高さに於て算出せらるゝとき、乙國の物價よりも低位に置かれてあ

る、それによりて一定金額の輸出超過が實現せられうるわけである。然れども、此場合、乙國の人々は甲國から買入るゝことを有利なりとするであらうし、或は甲國の生産財は國內消費にみてるゝ商品の生産より輸出商品の生産に移るのを有利なりとするであらう。かくして、爲替相場と購買力平價とが一致するに至らむとする傾向がそこに存立してゐるはずである。たゞ爲替相場が購買力平價までに引もごらうとしても、不利なる貿易外支拂超過の爲に、もどり得ないだけのことである。此意味に於て現在の爲替相場は均衡的な價格であるとは云はれ得ない。若し均衡的な爲替相場が成立するならば前述の事情によりてそれは更に變動するであらう。かく見來れば、與へられたる場合に於ける購買力平價は逃亡しゆく平價である。爲替相場がそこに落ちつかむとして動けば、購買力平價は常に先へ先へと進行してゆく、從ひて二者の合一は考へ得られない。

與へられたる事情の下に於て存続する事實はかうなつてゐる。國際收支は均衡を保たざるを得ぬ、かくて年々の利子(又は賠償金)は輸出超過を以て(又はその他の貿易外收入を以て)支拂はれつゝある。これに伴ひて甲國の物價(金物價)は低位にある。而もこのことは、國內物價の騰貴が抑壓せられてはじめて可能にせられてゐる。利子(今の場合には國債の利子を考へる)又は賠償金が租税の形式に於て徴收せらるゝとせよ、國內の購入餘力は不斷にそれだけ切り縮められ、物價

が國際的水準（今の例に於ては乙國の水準）までに上昇し得なくなつてゐる。戦後の各國について此事情は十分に看取せらるゝと思ふ。而も此場合購買力平價と爲替相場との開きが存續してゐる故を以て、購買力平價と爲替相場の均衡點が永久に變改せられてゐると見るのは、その當を得ぬであらう。甲國內に於ける購入餘力の不斷なる縮少のために、爲替相場が購買力平價と合一し得ぬ過渡的状態が、そこに連續してゐるのに外ならずと思はれる。

國際間の資本移動の關係から、ボツグズの如きは成熟せざる債權國、成熟したる債權國、成熟せざる債務國、成熟したる債務國との四の定型を考へ、それらの貿易均衡の特徴をあげてゐる。要は、貿易外收支の差額が輸出入の差額を以て決濟せらるゝに至る傾向を認めたるものである。而して此傾向の存するが爲に歐洲の物價は必然的に米國の物價よりも低位にあると云ふ<sup>13)</sup>。たゞ私は此傾向を以て、理論的に必然のものであるとは考へぬ、事象の進行は他の方向をとりうるものであるとも考へる。これは前にのべたるが如くである。かゝる傾向は恐らく、いくらかは國家の意識的な統制によりて存立しつゝあるものではないかと思ふ。その點は何れともあれ、不斷なる國際的債務の履行が如何なる形式を以て行はるゝにもせよ、債務國の物價は購入餘力の切下げの爲に伸び得ずにあるはずである。不利なる支拂が國際貸借の關係上、爲替相場を債務國の側にとりて不利なる地位に置き、これが購買力平價と爲替との開きを生ずることを述べたが、なほ

13) Boggs, International Trade Balance in Theory and Practice, 1922.



事象の他の側面を見よう。外國資本の利子は必ずしも國債の利子ではないであらう。企業會社の社債の利子、又は配當でもあり得よう、此場合それは租税の形式に於て徴收せられるのではない。しかし甲國內の購入餘力が削減せらるゝ點に於ては一である。又賠償金として支拂はるゝものが如何なる收入形式によりて國民から徴收せらるゝかも仔細に吟味せらるゝことを要する。それによりて物價の上に作用する様式が種々であらうから。然れども結局に於ては、それも購入餘力の削減によりて物價低位の現象を生むに相違ないと思はれる。但し通貨膨脹に基く物價騰貴に際して、爲替相場下落が物價騰貴の率よりも大なることは別に述べたる如くであるが、その事情が此際どれだけ協働するかについては、今立入ることをさける。

私は如上の立場から、ケインズの所説に承服しがたき、少くも私の理解し得ざる、數多の點を認める。『一國の勞務及び物産と他國の勞務及び物産との間に、資本の移動、賠償の支拂、勞働の相對的能率の變化、或はその國の特産物に對する世界の需要の強さの變化、と云ふ如きものゝ爲めに、經濟學者の所謂交換方程式に變化を生ずれば、購買力平價と爲替相場の平衡點は永久に變改せらるゝに至るであらう』<sup>14)</sup> ケインズは此見解に基き、一九一九年以後一九二二年に至るまでの弗貨を以て測れるポンド、フラン、リラの爲替相場と購買力平價とを比較してゐる。『一九一三年以後交換方程式にある變化があつたものらしく』、『獨逸の如き種々の點に於て、平衡を破る變動の遙に激烈であつた所にては、一九一三年を基準とする購買力平價と實際の爲替相場との調和は、一時的にも又は永續的にも、非常に攪亂されたものである』。而して採録したる數字に誤なくば、『歸納的に、戰爭の財政的結果は、磅貨の弗貨に對する購買力平價の均衡を一九一三年以來、一步乃至二步

五厘方低下せしめたと推論せしめ易いであらう」と云ふ。私は、相互需要の變動の存したる場合について、かゝる主張の成立しがたきことを述べてゐる。その他の事情(たとへば資本の移動、賠償金の支拂の如き)によるにしても、購買力平價と爲替相場との一致せざるのは、均衡狀態の成立せざるが故にして、決して均衡の位置が購買力平價の點より遠ざかれる故ではないと思ふ。ケインズは過渡的なるべき事象を均衡的のものと解してゐないか。

さて購買力平價説は此の如く緩和せられたる形態をとるとき靜的なる爲替相場、又は貨幣の靜的對外價值を説明するものとして許され得ると思ふ。勿論これは、購買力の比率が一義的に爲替相場に落ちつくところを決定すると云ふ意味をもつものではなく、靜的狀態にありては、購買力平價と爲替相場との相一致し相均衡することを意味するものである。然れども、この點に於ては價格に關する靜的法則として知らるゝ生産費法則、又は費用法則とても、これと趣を異にするものではない。その意味するところは、競争の十分に行はるゝところ、價格と生産費とが相一致すると云ふに止まる。生産費が必ず價格を自己の大きさまでに引きつけると云ふのではない。生産財の價格そのもの、從ひて生産費そのものが變化する。而して、價格もまた供給數量の變化につれて動く、二者の歩みよりによりて生産費と價格との一致を見るに至るのである。すべての經濟的數量は相互依存の關係に立つ、一方が單に他方を決定すると云ふことはあり得べからざることである。勿論購買力平價説は決して、靜的對外價值の究極的な説明とは稱しがたい。此説明が如何なる仕方に行はるべきかは、前に述べたところである。然れども、その大體の落ちつ

く姿を示すものとしては十分なる學問的價值を認められていゝと思ふ。

購買力平價説は金本位國相互間の爲替相場を説明し得ず、その説明は國際貸借説のみがよくし得るところであると云ふ見解も一應は思ひつかれるであらう。然れども、私の見るところによれば、金本位國相互間たると不換紙幣國相互間たるとを問はず、爲替相場の市價、即ち動的價格としての爲替相場はすべ國際貸借説によりて説明し得らるゝはずである（ある場合、國際貸借説が現實の爲替相場を説明し得ずと見られたことがある、しかしこれは此の學説の適用について十分にその行はれうべき條件のそこに存するか否かの吟味をかきたる見解であると思ふ）。而して、靜的價格としての爲替相場に至りては、たとひ金本位國相互の間についてもやはり購買力平價説によりて説明し得らるべきではないかと思ふ。

金本位國相互間の爲替相場は國際貸借説によりて説明し得らるべしと云ふにしても、それによりて説明し得らるゝものはたゞ、動的なる爲替相場である。而も此動的價格とても常に動き得る一定の限界があり、それが金の現送點によりて限られてゐる。此限界そのものは國際貸借説自體の説明し得るところにあらず、云はゞその中にとり入れられてゐる異分子である。また不換紙幣國相互間の爲替相場についても、その市價はすべて國際貸借説のみがこれを説明し得る。その靜的價格に至りては購買力平價説によりて説明し得らるゝこと云ふまでもなきことであるが、金本

位國相互間の爲替相場についても、靜的價格、即ちその落ちつくところはたゞ購買力平價説のみの説明し得るところであると云はれ得ないか。金の現送點が騰落の限界をかざると云ふのは國際貸借説中の異分子であるが、此異分子こそはまさしく、購買力平價説の一方面として見らるべきものであらう。

今、金本位國間の爲替相場について考へる。此場合、購買力平價説は何等支配の餘地なきやうに考へられよう。(勿論爲替相場はしばしば、購買力比率、其他の事情から現送點を割る。かゝる場合に於て、購買力平價の傾向が作用してゐると見うれ得はしよう。併し茲には、此種の事情を離れて考へる)。何となれば、爲替相場の動きうる限界は大體金の現送點によりて限らるゝから。然れども進みて考ふるに、購買力平價説の主張は爲替相場が物價の比率と一致すると云ふにある。然るに、何れの金本位國にとりても、金は特殊なる地位を占むる商品である。その需要が無限に大となりうる商品である、少くも國際的交通についてはさう見ることが出来る。それ故に、爲替相場を決定するところの物價の比率を見る場合に於て、之を此際金の價格の比率として考へうる。金の需要は無限に大なり得るが故に、物價の比率を構成する場合、これに對して他の財の價格を看過することが出来るわけである(物價指數は常に一定の目的を以て構成せられる<sup>15)</sup>。購買力平價の考察については輸出入の範圍に入りこむ財についてのみそれを構成する、しかし金が自由

15) Haberler, New Index Number, Quarterly Journal of Economics, May, 1928.

に出入しうるときには、それに對する需要の無限に増加し得る金のみをえらび、需要の有限なる他の財を軽く見る。加重の際、金に極大の重みを加へ他の財に有限一定の重みを加ふる爲に、事實に於ては他の財の價格を看過して、問題とする物價指數を構成するのである。かくて金の現送點は金本位國間に於ける此意味の購買力平價に外ならぬ。此場合、購買力平價が一の定まれる大きさに非ずして、上下の限界をもつ二の現送點間の大きさであることは、何等問題とすべきことではない。不換紙幣國間に於ける購買力平價に於ても、それは一の定まれる大きさではなく、一定の限界の間にあるところのある範圍であることは、前に述べたところから知り得ることである。

橋爪教授は此點についての一の新なる、而も注目すべき見解を發表せられてゐる。『或は又、カッセル購買力平價説に存する前述の難點を顧慮して、その主張を多少緩和し、それによつて凡ゆる爲替現象を一貫して説明するのも有力なる一傾向であらう。而して、この試みは、金本位制度を採用する諸國間に於ては、物價平準が大體均等化するから、金平價は即ち購買力平價に合致することによつて、容易に達成され得ると思ふ』<sup>16)</sup>

私見は金平價を以て、特殊の場合に於ける購買力平價なりとする。構論に多少の無理あることを思はないのではないが、その主張から引き出される結論は大體事實にあてはまると思ふ。橋爪教授の見解は金平價が購買力平價に合致するとするにある。しかし事實は果してさうであらうか、

それによりて爲替相場の現送點の範圍に落ちつくことを説明し得るであらうか。教授の立論から云へば、爲替相場が金平價に落ちつくのは物價水準が大體均等化せらるゝからである、即ち購買力平價がこれと一致するからである。此説明が十分にあてはまる爲には、金本位制を採用する各國に於ては物價水準が大體一致してゐなければならぬ。勿論此事を直接に事實についてしらべることは極めて困難であらう。然れども、これを間接にしらべることは必ずしも難事ではない。此説明の仕方からは次の如くに論結せられ得る。若し金本位國相互に於ける爲替相場は購買力平價によりて定まる故に金平價に合致するものならば、爲替の金平價に合致してゐるところ、購買力平價がそこにあるはずである。此意味に於て、戦前の各國物價は均等化せられてゐたはずであらう。而して同様なる理由によりて、今日の各國物價もまたさうである。そうであるとすれば、戦前に於ける物價指數を基準としたる各金本位國の物價水準は大體一樣であるべきはずである。然るにこれが如何にまち／＼であるかは統計の數字から容易に知り得るところである。なほ、また物價水準の直接なる比較は極めて困難であるが全然不可能のことでもない。戦前、金本位國相互間に於て、爲替相場が大體金平價によりて定められたるときに於ても、北米合衆國の物價が英國のそれよりも、英國のそれはまた伊太利のそれよりも高いと云ふ風に、各國の物價にある程度の差異があつた事はほとゝ認められてゐる。今日に於て、此比較が如何なる結果に到達するかは私の

知り得ざるところであるが、各國に於ける物價が全く均等化してゐると云ふ結果を豫斷しうべき理由はないと思ふ。要するに、金本位國相互間に於ける爲替相場は金平價によりて決定せられてゐる。而も、此狹き範圍の動きが購買力比率に従ふものであるとするならば、購買力の割合の變化は、此狹き範圍を超えざるはずでなければならぬ。然るに、これは事實の示すところではないと思ふ。私の主張はなほ一の思考實驗によりてたしからめられ得ると思ふ。甲乙兩金本位國があり、何等から突發的事情の爲に甲國の物價が急に以前の半分に低落し、乙國の物價は以前のまゝであるとしても、爲替相場は金平價に於て定まるであらう。而して購買力平價は以前の二分の一に急變してゐる。もとより、このうち、物價の均等化の運動の行はるゝことは全然別の問題である。此の如く金本位制度の存するところ、物價の如何に拘はらず、爲替の金平價に支配せらるゝことは、購買力平價の故に爲替が金平價に落ちつくこと云ふ見方を不可能ならしめるではないか。爲替相場が現送點から著しく離れ得ざること、此點によりて動きが可なりに束縛せられてゐることとは、私見と異なる購買力平價の見方からは殆ど説明せられがたい事であると思ふ。

前に述べたるが如く、私見に多少の無理があることを自ら考へぬのではない。併しながら、金本位國間の爲替相場について購買力平價の支配によりそれが現送點を離れがたいと云ふ主張を確實に打ちたるには此外に考方がないやうに思はれる。各金本位國に於ける金物價の著しき差異は私をしてかう信ぜざるを得ざらしめる。もとよりこれは、多分實益なき一試論であらう。